

横浜の仕事

慶一、元気か。今年は高校受験。勉強してるか？ お母さん心配してたぞ。じいさんは相変わらずだ。毎日毎日アイロンかけた。

でもこの頃、店でアイロンをかけてると覗いていく小学生がいる。なんでも、テレビの番組でクリーニング屋が出てくるらしい。わしがアイロンかけてると、一生懸命見ている。昔のおまえを思い出すよ。昔、おまえに話した話をその子にしてやると、「僕もクリーニング屋になろうかな」だと。お世辞でもうれい。確かおまえもよくそう言ってたな。

日本で最初にクリーニング屋ができたのは横浜だ。横浜港ができて外国船がたくさん入港するようになって、西洋式の洗濯が伝わった。だから洗濯屋と呼ばずに、できた当初から洋風にクリーニング屋と呼ばれたんだ。

わし等の頃は、クリーニングの基本はワイシャツのアイロンかけで、一人前になるのに最低でも五年はかかると言われた。親方から怒鳴られながら、先輩にこづかれながら覚えたもんだ。でも今は、クリーニング屋にも学校がある。基礎から教えてくれて、最後は国家試験を受けてクリーニング師だ。職人の世界も変わってきた気がするが、なんとと言っても、職人の最後の決め手は技術だ。

わしのような個人商店が、料金の安いチェーン店に負けずにやっていくためには技術しかない。アイロンかけだって、プレス機との違いがわかるお客さんにはわかるんだ。染み抜きだって、他じゃ駄目でもうちに来れば大丈夫、てな具合に。おかげで、わしはこの歳で毎日毎日まだまだ勉強だ。

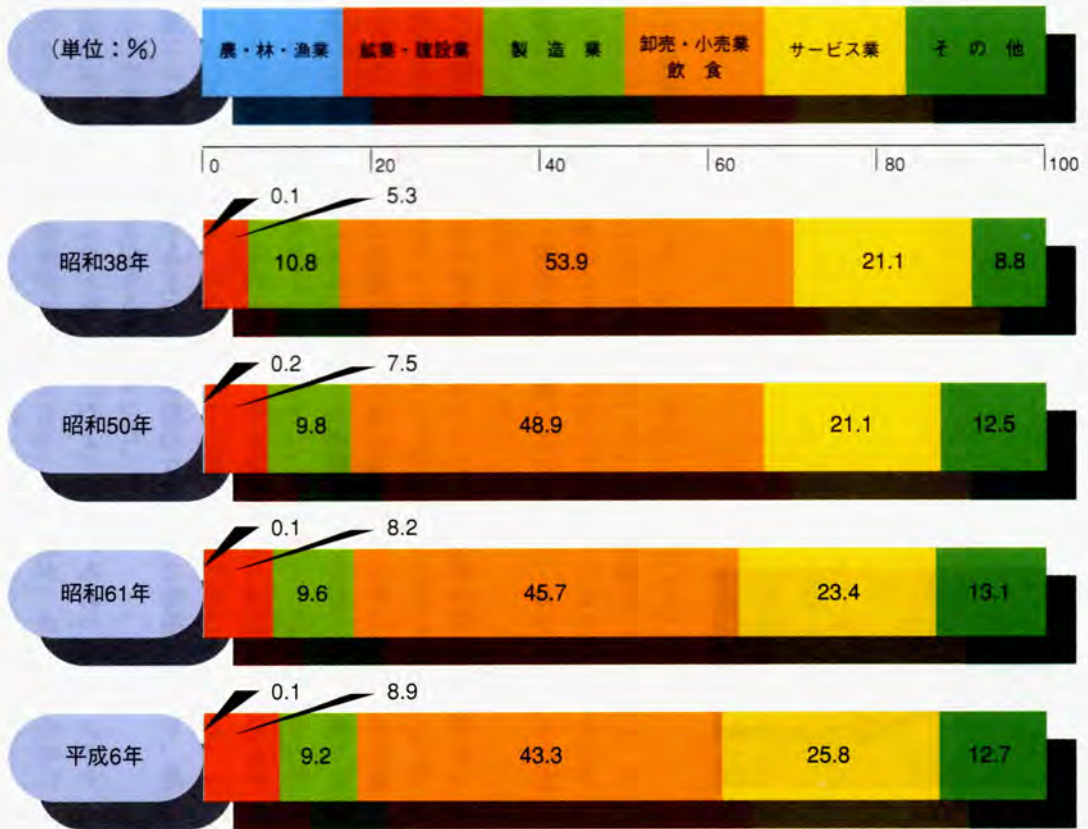
慶一、おまえも勉強がんばれよ。嫌いなことも苦手なこともわかっていくけど、毎日毎日の積み重ねがすべてだ。疲れたら、じいさんのアイロンかけでも見に来い。四十五年の年季もんだぞ

(西区 S・Aさん 六十歳)

横浜市の産業構造

〔事業所統計調査・事業所名簿整備調査〕

・横浜市の産業構造を事業所数割合の推移から見ると、昭和三十八年に五三・九％であった「卸売・小売業、飲食店」が平成六年には四三・三％と一〇ポイント以上減少している。
 ・割合が増加傾向にあるのは「鉱業・建設業」「サービス業」だが、全体の構成比に大きな変化はみられない。



横浜の仕事

インタビュー



鈴木稲雄さん

元荷役総監督
92歳 南区在住

横浜港の生き字引といわれる鈴木さん。関東大震災の頃から仲仕として働き、現役生活は実に七十三年間にも及んだ。現在は、かつての港での仕事の様子を伝承していこうと、仲間と共に冊子づくりをしている。言葉、仕事のやり方、風俗など、現在の機械化された港湾労働の姿とはまったく違うという。

■関東大震災の頃は、朝五時には仕事が始まった。五時に足船が出る。岸壁から本船に行く奴。槽が三丁で、船底まで三尺くらいの深さの船を、漕ぐんだ。

■組には常雇いの通いと部屋子がいる。私がいた組は、五十〜六十人いたね。それと日雇。仕事は日雇に教わられて言われた。よく仕事を知っているんだ。たいてい四十過ぎてた。常雇いで会社にしばらくられるのはいやだった、日雇で仕事を請け負うんだ。

■昭和四十二年、コンテナが入ってきた。今からもう三十年前だから、おれが六十歳の時だね。コンテナなんて知らないからさ、びつ

くりしたよ。話を聞いても、最初はチンブンカンブン。波をかぶっても大丈夫のように、カネの箱でできているというじゃないか。積み方も変に積んだら船がもたねえという。

■ところが、ロサンゼルスからきた一回目のコンテナが、横波くっちゃってサ、中の荷物がめちゃくちゃ。早い話が、ロッカーの中に着物ぶらさげたまんまと同じことだよ。いろいろあって、コンテナの中の荷物の積み方がうるさくなった。

■コンテナが登場するまでは、本船のウインチで荷揚げしたり、荷下ろしをしたわけで、一口十五人で三百トン揚げたこともある。一人当たり二十トン。そのかわり、そんな日は帰りは目なんか見えやしねえ、なんだかボヤーツとしちゃって。歩けやしねえや。昔の仕事には、今みたいにクレーンなどの機械がないから、知恵を絞ったもんだ。失敗すれば荷物が人間が海に落ちこちるわけで、大きな貨物なんかは、三本のチェーンブロックでバランスをとり吊り上げる。十分研究したよ。港の仕事は、我々のような現場の仲間が技術をつくり上げてきたと誇りに思っている。

■関東大震災前から横浜の港で働いているから、おかげで「生き字引」と言われる。港のことは大抵のこと知っているからね。ありがたいことには、今はどこを歩いても、大きな顔をしているよ。どこの社長や支店長でも、会えば「おおっ」って声をかけてね。



インタビュー



(株) 山王
甲山文成さん

取締役総務本部長

貴金属メッキ一筋の山王は、時代のニーズにマッチした技術力で、日本のエレクトロニクス産業をサポートして来た。堅実経営をモットーにする同社では、不景気の中にあつては人を大切にす一方、徹底した経費削減と生産性向上のための投資を行い、実際にバブル期の四倍という生産性アップを実現した。

■ 3Kという言葉がありますが、うちは純金メッキだから24Kだという説もあります(笑)。しかし、うちの3Kは、「貴金属メッキ」「研究熱心」「公害なし」のKなんです。

■ インダストリー・カンパニーというところではいいですが、平たくいえば、当社は下請けです。まずメーカーがあつて、そこに部品を提供するパーツメーカーがあつて、その下に私どもが位置しているわけです。ただ、メーカーさんに直接納めている部分もあるし、パーツメーカーに納めているということもあります。

■ しかし、エレクトロニクスの発展という意味では、当社なりにかなり貢献してきたという自負は、会長以下、全員が持っています。というのは、お客さまのニーズに応えた形でメッキしないと、部品を小さくできないとか、うまく電気が伝わらないとか、部品が設計図通りにできないとかいったことが出てくるわけです。ですから、金メッキ技術の開発があつてこそそのエレクトロニクス産

業なんです。われわれの技術が、お客さまのニーズに着実に応えて、日本のエレクトロニクス産業の隆盛をサポートして来たわけですから。

■ 当社は昭和三十年の創業で、当時はエレクトロニクス関係のメッキというのが、日本ではまだあまりなかったんです。おかげでどんどん注文が来るようになり、川崎市の山王町に工場をつくりました。その後、手狭になって、現在の場所に移ったのは昭和四十二年です。ここに来た一つの大きな理由は、工業地域だったからです。メッキの場合には、排水関係がかなり規制される場合が多いのですが、工場地域だと一般の住民の方に迷惑をかけないで済みますから。もちろん、日本の排水処理というのは世界第一級ですし、当社も排水処理専門の会社とタイアップして、万全を期しています。

■ バブルがはじけてからも、当社は人員整理はやりませんでした。私どものポリシーとして、人に手をつけるのは一番最後という考えがあるからです。それで、代わりに徹底した経費の削減を行いました。固定費、変動費を問わず、とにかく無駄な費用を削減する。それから、生産性を上げるための投資を行いました。当時、バブルははじけて、コストがかなり下がってしまいましたが、仕事量はけっこうあつたんです。一日でいうと十六時間分くらい、つまり二交代分くらいは仕事がありましたね。幸いにして、バブル期に投資をしていないので、内部留保はかなりありましたから、それを使って経費が安くなるような方法を考えましょうということ、生産性を上げるために、従業員にも知恵を出してもらおうと共に、いろいろな投資を行いました。経費削減と、生産性を上げるための投資を続け、六年前の生産性に比べると、ざっと見積もつてですが、四倍くらいの生産性になってきました。

インタビュー



石塚俊雄さん

留学生会館
ゲストハウス経営
48歳 旭区在住

市内で、留学生会館・ゲストハウスを経営する石塚さん。毎日たくさん
の国の人々と接しながら、地道で心の通った国際交流を実践してい
る。

■以前は割烹料理店をやっていたのですが、朝四時から夜十二時ぐ
らいまで働くという生活でしたから、体をこわすということで、
家族の猛反対でやめたんです。その後しばらくの充電期間中に、
外国から友人が遊びに来て、日本のホテルに泊まるのは高くて大
変だというのを聞きまして、空いている店の一室に泊めましたと
ころ大変喜んでいただきました。それが、ゲストハウスを始め
きっかけでした。その後ゲストハウスの経験を生かし、一九九四
年旭区に留学生会館を建設いたしました。

■ゲストハウスを始めたはいいけれど、横浜で初めてのことで、
「こんなところできませんでしたよ」というのを、どうやって告知して
いいかわからないんです。(笑) 知人からの提案で、英会話学校な
どにファックスで呼びかけたらと言うんで、とにかくそうしておい
たところ、半年くらい経ってやっと、オーストラリア人の女性から
入りたいと言ってきましたね。嬉しくって、一緒に飲みに行ったり、
キャンプに連れて行ったりしました。そしたら、三か月くらいたっ
た頃、彼女が不思議そうに聞くんです。「どうしてここには、ほか

の人が誰も来ないの？」と。そこで正直に「人を集める方法がわか
らなくて、実はあなたが最初のゲストなんだ」と言いますと、「じゃ
あ、私がほかの人を入れていいのね」ということになりました。そ
れからその女性によるヒルストンハウスの紹介が始まりました。そ
れから十日間くらいで、十五人が入居しました。それが今から八年
ほど前。以来、ゲストハウスはいつも満杯です。

■ゲストハウスは独身者が多く、高校や大学、外国語学校の先生
がほとんどであり、留学生会館は、大学の学部学生や研究生とそ
の家族です。両方合わせると十五か国、常時四十〜五十人の人が
暮らしています。横浜ヒルストンハウスは留学生会館とゲストハ
ウスで一つの大きなファミリーなんだというコンセプトのもとに、
合同でパーティーやスキーなどのイベントをしたり、地域交流の
一環として、小学校の異文化理解教室をお手伝いしたりしていま
す。

■留学生たちとのエピソードは、語り出したらきりがありませんが、
一つだけ挙げると、最近こんなことがありました。インドから来て
いた留学生夫婦の子どもに目の障害があり、横浜市内の大病院で
手術を受けたんです。手術は見事に成功しました。このことを留学
生夫婦がインドの両親に知らせた後、その両親から私に手紙をいた
だきました。そこには「自分は日本にいないから恩返しができない。
それで、代わりにインドで恩返しをしました。自宅に恵まれない人
を三百人程呼んで、食事をふるまいました」とあり、大変感激いた
しました。

■国際交流とは、外国人に芸術や科学などの高等文化や歌舞伎な
どの伝統文化を紹介するだけでなく、「思考や衣食住に代表され
る生活様式としての文化をお互いが理解することが最も大切であ
る」と思っており、これらを体験し理解した人が、後日、日本あ
るいは横浜と世界を結ぶ架け橋となり、真の国際交流が生まれて
くるでしょう。それには日本で学ぶ留学生や、働く外国人の方々
が重要な役割を担うわけです。この辺をよく考慮した対応が必要
であると感じています。